

凡例

--- 計画路線（トンネル部） ——— 計画路線（地上部） - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。  
 注2. 凡例は、図4-2-1-16(2)に示す。

本図は、国土調査による「1/200,000土地分類基本調査 地形分類図(長野県)」(昭和49年、経済企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-16(1) 地形分類図





# 凡 例

<b>山 地</b>	
	<b>大起伏山地</b> 起伏量600m以上の山地で日本アルプスと呼ばれる飛騨・木曾・赤石山地をはじめ、若首、白砂山地、河東山地、小谷山地、戸隠・東山地、筑摩・河内山地、鉢山山地、阿寺山地、東部、佐久間山地などに広く分布するほか、犀川山地、聖山地、鉢山山地、聖山地、関田・黒川山地、恵那山地、下伊那南部山地の高所を占める。著するに東西の山地（火山地をのぞく）の大半が、この大起伏山地で占められている。
	<b>中起伏山地</b> 起伏量400～600mの山地で、関田山地、関田山地、河内山地（筑摩・河内山地の東部）、河東山地、恵那山地、下伊那南部山地などに広く分布する。概して大起伏山地の周辺に分布している場合が多いが、関田山地や関田山地のように全体的に中起伏山地の性格をもつ場合や、犀川山地・鉢山・黒川山地、阿寺山地のように山地内の高所あるいは旧断崖谷の沿岸に分布する場合もある。
	<b>小起伏山地</b> 起伏量200～400mの山地で、これには、(1)丘陵に近い性格をもつもの（犀川・沼南・菅原山地および北信濃丘陵台地）、(2)山麓的性格のもの（伊那山地西部）、(3)湖沼地域にあって局地的基準面の高いもの（砂波・聖山地、関田・黒川山地、阿寺山地、下伊那南部山地）がある。(3)は分水嶺をさかいて大・中起伏山地に接することが多い。阿寺山地の北部と南部、砂波・黒川山地の西部と東部（群馬側）の場合が好例である。
	<b>山 麓 地</b> 山地の縁辺にあって緩斜面をなす部分。傾斜は一般に8°～20°の範囲で、山地の主体部との間に明確な傾斜変換線がある場合が多い。盆地の縁縁や山間地に点在し、大部分は地層からなる山麓堆積面で、小渓流沿いの堆積地形であることが多い。
<b>火 山 地</b>	
	<b>大起伏火山地</b> 火山地は白馬群峰・焼岳・乗鞍・御岳などをのぞけば北東半部のフォッサ・マグナ地域に広く分布するが、大起伏火山地は、火山地のうち起伏量600m以上の部分を指す。おもに山頂に近い火山体上部がこれにあたるが、基盤山地の起伏量が大いいために広範囲に大起伏火山地をなす場合も多い。開析の度合は火山によって差異が大きく、縁部・形態は多種である。
	<b>中起伏火山地</b> 起伏量400～600mで、おもに火山の中腹部分に分布するが、毛無火山の東部、霧ヶ峰火山および八ヶ岳火山北部では火山地の主体をなしている。
	<b>小起伏火山地</b> 起伏量200～400mで一般に火山の中腹から山麓にかけて広く分布するが、基盤山地の高いところでは、小起伏火山地および山麓地を欠くことが多い。一方、毛無火山地東南部の方々の平行近および霧ヶ峰火山では高所にかなり広い分布地がある。
	<b>火 山 麓 地</b> 成層火山の「裾野」にあたる部分で、一般に火山体の周縁部を占め、15°以下、多くは8°以下の平滑な緩斜面を展開している。起伏量の点では小起伏火山地に入る部分もかなりこの区分に含まれている。おもに火山砕屑物の堆積地形で、二次堆積によってつくられた火山扇状地も含む。島嶼子・済開火山の周縁および八ヶ岳火山麓に広く分布がみられる。八ヶ岳火山麓は放射谷および周縁の河川により段丘化している。
<b>丘 陵 地</b>	
	<b>大起伏丘陵地</b> 起伏量100～200mの丘陵地で長野盆地北部の長丘丘陵・美穂丘陵および佐久盆地西方の八雲原・御牧が原台地に分布する。ともに台地をとりまく傾斜地の部分で、洪積緩いし崩断・洪積緩からなり、後者は起伏量が200mを若干超える部分もある。
	<b>小起伏丘陵地</b> 起伏量100m以下の丘陵地で飯山盆地西部の長峰丘陵のほか、台地の間格斜面の部分が含まれている。
	<b>火 山 性 丘 陵 地</b> 起伏量200m以下で火山泥流または火砕流の堆積物からなる丘陵地である。野尻湖周辺のほか、南佐久の小海原台地（傾斜部）がこれにあたる。
<b>台 地</b>	
	<b>砂礫台地(上位)</b> おもに洪積世中期以後の砂礫層からなる高位段丘もしくは旧期急傾地で松本盆地、伊那盆地、犀川盆地および木曾川流域に断片的に分布する。厚さ10m内外の火山灰層におおわれているものが多い。
	<b>砂礫台地(中位)</b> 砂礫からなる中位段丘・中期急傾地面で、長野盆地、上田盆地、塩川盆地、犀川盆地では開析段丘として広く分布し、伊那盆地では数段の段丘群からなっている。長野盆地をのぞく地域では火山灰層におおわれている。
	<b>砂礫台地(下位)</b> 比高数m～20mの低い砂礫台地で、洪積世末期の段丘面と沖積段丘の2種が含まれる。長野盆地、松本盆地などに分布する開析段丘(下位面)の末端部は低地(はんらん地)に埋没もしくは漸移し、地形区界は明確でない場合が多い。
	<b>ローム台地(上位)</b> とくに深い火山灰層におおわれる台地で、八雲原・御牧が原台地がこれにあたるほか、四阿山西麓(安平)、八ヶ岳東麓などに分布する。
	<b>岩石台地(上位)</b> 岩石台地とは台地の主体が岩石(洪積世前期の地層を含む)からなるものを指し、主として先行性河川沿いに分布するが、上位面は千曲川下流域のように新期の堆積岩層(磐新・洪積緩)の積出層をなすものが多い。
	<b>岩石台地(中位)</b> 千曲川下流、犀川中流のような先行河川沿いや、諸河川の上流山間部に小規模の河岸段丘を形成している。
	<b>岩石台地(下位)</b> 比高20m以下の低い岩石台地で、千曲川下流、犀川中流および一部の山間地の河川沿いにさめめく散在して分布しているにすぎない。

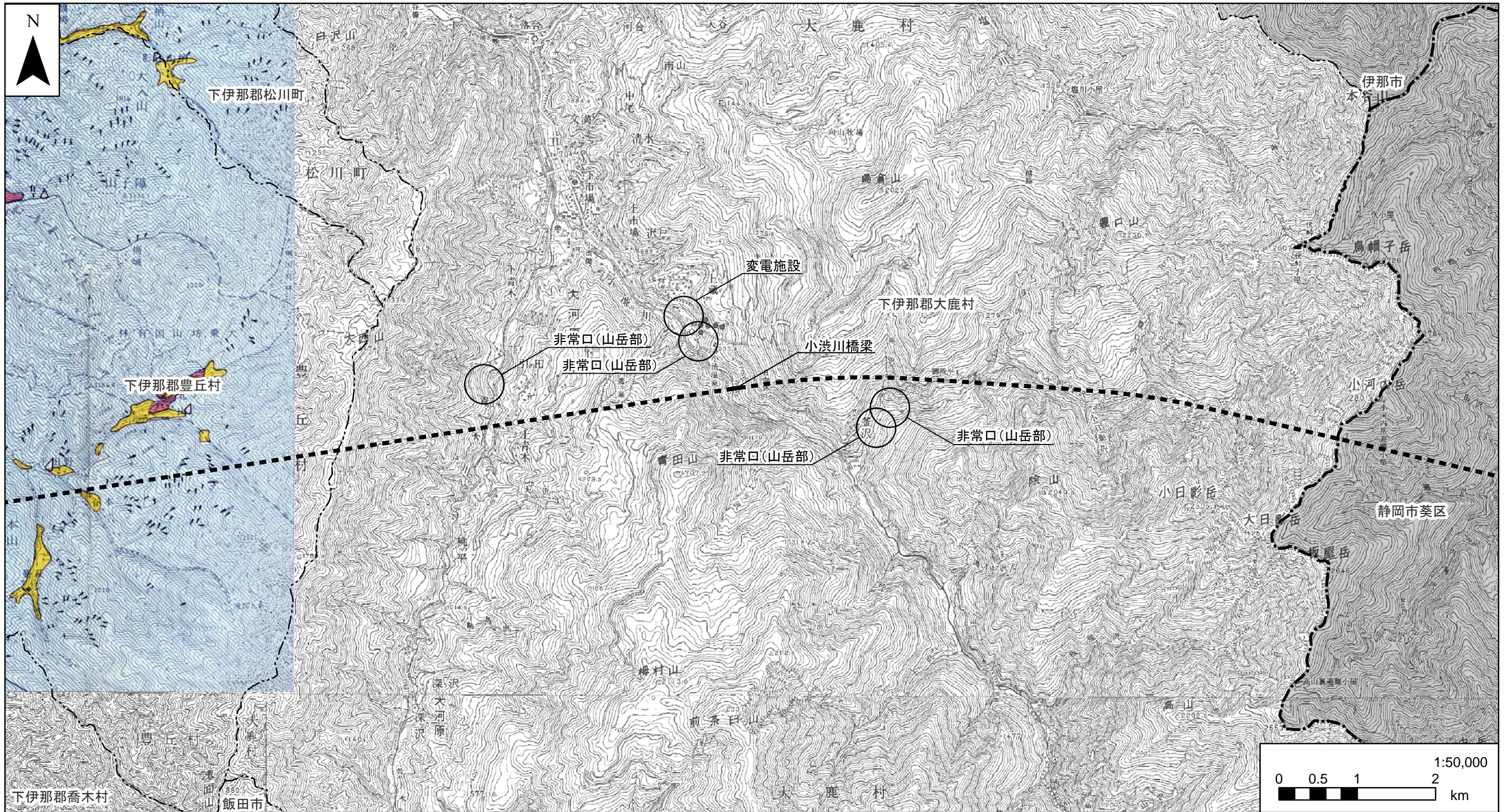
<b>低 地</b>	
	<b>扇状地性低地</b> 千曲川、犀川、犀川、天竜川、木曾川の本流および支流の氾濫原のうち砂礫質の堆積物からなる部分で、盆地底や山間の谷底部に分布する。本図においては低地の大部分がこれに含まれる。
	<b>三角州性低地</b> 沖積低地のうち、粘土・シルト・細砂が混成する部分で、扇状地性低地にくらべて低平で排水が悪い。内陸に位置する本県では分布は限定され、諏訪湖周辺の三角州半野および長野盆地北部の千曲川沿岸低地などがこれに相当する程度である。
	<b>自然堤防</b> 長野盆地北部および飯山盆地の千曲川沿岸と諏訪湖南半野に明確な自然堤防が分布し、特徴的な土地利用景観を呈する。
<b>付 加 記 号</b>	
	<b>主要分水界</b> 県境の大部分が分水界によって画されているが、下水内郡栄村、飯山市、北安曇郡小谷村、南佐久郡白田町、岡川上村、諏訪郡富士見町、木曾郡山口村、下伊那郡碓氷村、岡平谷村、阿夫竜村などでは必ずしも県境と分水界とが一致しない。県内では生活圏を分ける主要な分水界が記入されている。
	<b>地すべり地</b> 建設省、林野庁、長野県森林整備改善局による地すべり指定地域および指定を要する地域の範囲を記号で示した。ただし分布が密集しているところは地すべり地として広い範囲を括弧してある。フォッサマグナ地域北部の関田山地、犀川山地、聖山地、筑原山地および信濃の菅原山地などの新第三紀層の山地と小谷断崖および中央構造線沿いの地域に分布が偏在している。
	<b>崩 かい 地 形</b> 急斜面の一部が崩落して生じたあとの地形で窪地を呈するもの。飛騨・木曾・赤石山地をはじめ大起伏山地の急斜面や大起伏火山地の火山体上部に多く分布する。ほかに犀川河口付近の悪地状の崩かきや、台地・火山麓を刻む断崖谷の谷頭・谷壁の崩かきの顕著なものが記入されている。
	<b>顕著な侵食崖</b> 侵食によって生じた急崖のうち、とくに大規模のものを示してある。飛騨・木曾・赤石山地や戸隠山地などの大起伏山地の山体上部急崖と河川の峡谷部の側壁がおもなものである。

本図は、国土調査による「1/200,000土地分類基本調査 地形分類図(長野県)」(昭和49年、経済企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-16(2) 地形分類図







凡例  
 - - - 計画路線（トンネル部） ——— 計画路線（地上部） ●●●● 工事用道路 - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。  
 注2. 凡例は、図4-2-1-16(6)に示す。

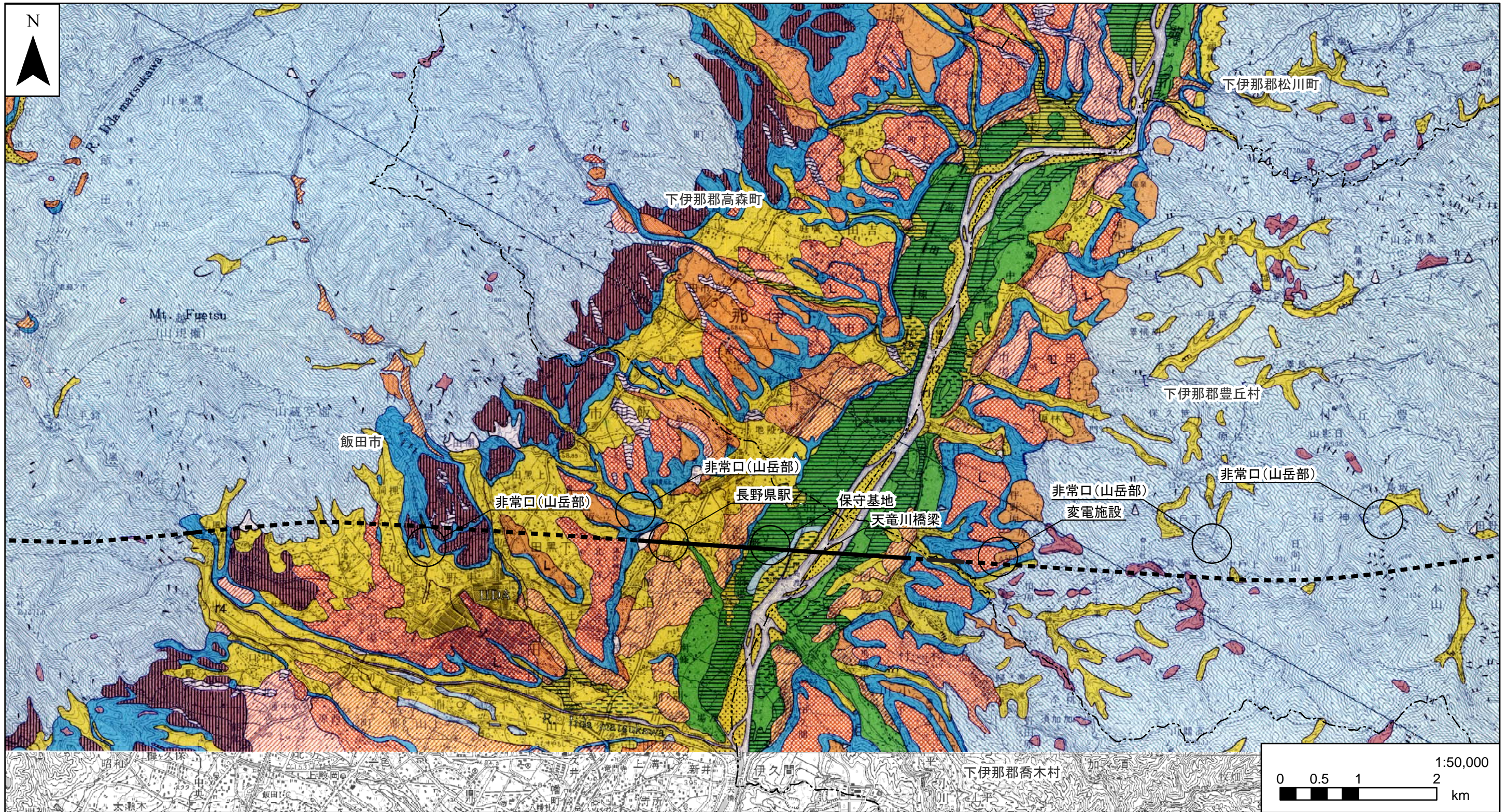
本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 地形分類図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-16(3) 地形分類図









凡例

--- 計画路線（トンネル部） — 計画路線（地上部） ●●●● 工事用道路 - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。

注2. 凡例は、図4-2-1-16(6)に示す。

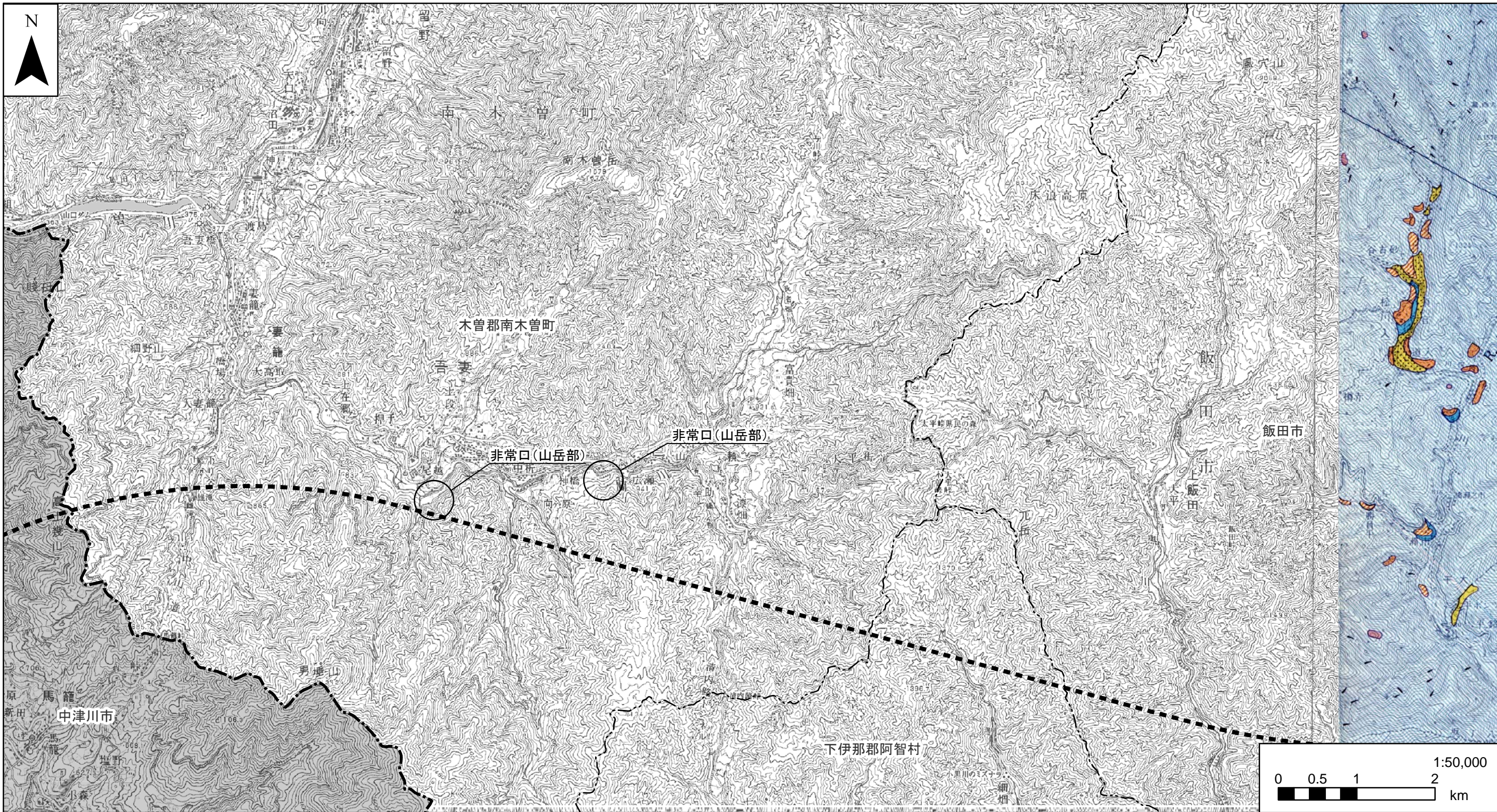
本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 地形分類図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-16(4) 地形分類図









凡例

--- 計画路線（トンネル部） — 計画路線（地上部） ●●●● 工事用道路 - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。

注2. 凡例は、図4-2-1-16(6)に示す。

本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 地形分類図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

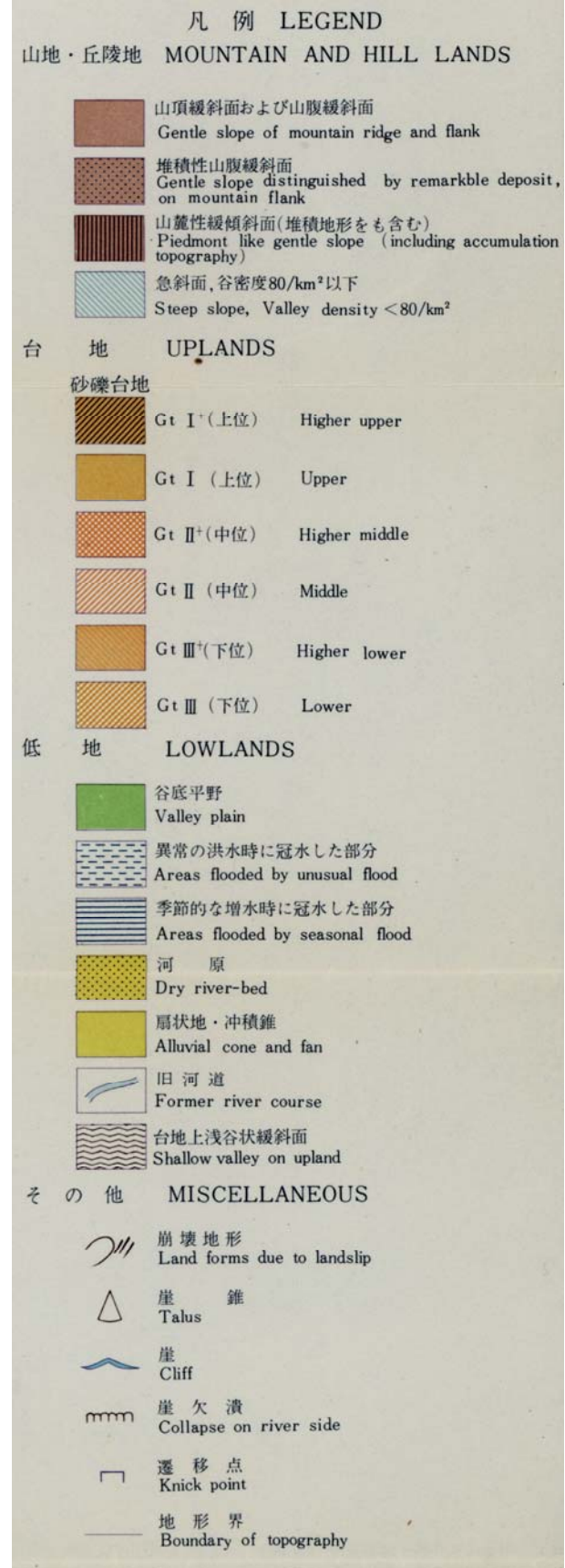
図4-2-1-16(5) 地形分類図







飯田



本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 地形分類図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-16(6) 地形分類図









凡例

--- 計画路線（トンネル部） ——— 計画路線（地上部） - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。  
注2. 凡例は、図4-2-1-17(2)に示す。

本図は、国土調査による「1/200,000土地分類基本調査 表層地質図(長野県)」(昭和49年、経済企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-17(1) 表層地質図







# 凡 例

未 固 結 堆 積 物	gsm	礫・砂・泥 (泥らん原堆積物)	主要河川沿いに発達する泥らん原は、自然堤防地帯と低湿地帯(旧河湾・後背湿地)に区分されるが、本図では一括して表現してある。低湿地帯では砂・粘土(N値はN=2~5)が卓越し軟弱地盤を構成している。
	sp	砂・礫 (扇状地堆積物)	扇状地堆積物も砂・礫(gsm)であらわしたが、一部をのぞいて地質図には表示していない。扇状地砂礫層は一般にN値がN>50で支持地盤として有効である。しかし扇状地は泥らん原堆積物と交互し、全体に軟弱層が厚くなっている。扇状地堆積物は大小の角礫や砂・粘土を混在し、分級度が著しく、固結度も低い。
	m	泥 (扇状地堆積物)	沖積性の泥または泥炭を主とする地層。厚さは10m以下である。現在、湿原ないし池沼をとまなう地域、火山山麓や旧河湾沿いに小規模に分布する。
	sm	砂・泥 (旧湖沼堆積物)	洪積世後期の湖沼堆積物。泥・砂を主とし、礫・泥炭をとまなうが、このほかスコリア・火山灰を多量に包含する。志賀高原では厚さ50~60mに達する。信濃町古間に発達する古間層は(厚さは5m以上)は砂・シルトおよび礫の互層からなる。下部にふくまれる泥炭層はpiceaを高率にふくみ、寒冷な気候をしめしている。
固 結 堆 積 物	gr	礫 岩	新第三系の顕著な礫岩層をあらわした。すなわち、守屋層および雷平層の基岩層や中山断層以西に発達する鮮新統にふくまれる礫岩などである。また、伊那市西方の古生界には含まれている礫岩の厚層および濃形流紋岩類に挟むる角礫岩層も本図で表示してある。
	ss	砂 岩	新第三系の砂岩を主とする岩相をこの記号であらわした。砂岩は細粒~粗粒、板状~塊状で一般に堅固である。しばしば礫質砂岩~礫岩をばさむことがある。なお本図では、赤石山地の中・古生界には含まれる砂岩(硬砂岩)も表示してある。
	ms	泥 岩 (頁岩、粘板岩)	新第三系の泥岩優勢の岩相をあらわした。古第三系と中生界は頁岩ないし粘板岩、古生界は粘板岩ないし千枚岩となっているが、これらを一括してこの記号(ms)で表示してある。
	alms	砂岩・泥岩互層	各地質年代にわたって時期的・空間的に広く分布する。新第三系の砂岩泥岩互層は礫岩をばさむことがある。また古第三系の互層(北相木層)も下部に顕著な礫岩が発達する。中生界は砂岩・頁岩、古生界は砂岩・粘板岩を主とする。長野盆地西縁部を占めて分布している豊野層(洪積世中期)に属する互層は半固結(軟岩)である。
	alms	砂岩・礫岩互層	新第三系の最上部を占めて発達するモラツス型の堆積物(礫丸層および礫相粘岩層)を本図で示した。主として砂岩・礫岩の互層からなるが、礫岩の層は上部ほど多量である。酸性凝灰岩がふくまれているが、その一部は堆積している。
	alms	砂・礫・粘土層 (軟 岩)	洪積世前期~中期の湖沼堆積物を一括して塗色した。灰白色のシルト~粘土層と褐色~灰褐色の砂層との不規則な互層からなるが、しばしば礫層をばさみ、また泥炭をふくむことがある。全体として火山灰質である。層相は激しく複雑化している。半固結(軟岩)。
	Sch	輝緑凝灰岩	本県古生界は粘板岩・砂岩・チャートを中心とし、このほか石灰岩・輝緑凝灰岩を挟んでいる。赤石山地の戸台構造帯・小波帯に発達する古生層にはよく輝緑凝灰岩が多く発達し、ときに石灰岩と互層をして、緑色~赤色の凝灰岩が石灰岩中に薄層をつくって、はさまれている。佐久山地の古・中生層もすべし輝緑凝灰岩をとまなっている。
	ch	珪 質 岩 石	飛騨山地・木曾山地・赤石山地の古生層(石炭紀~二叠紀)および佐久山地の古・中生層は珪質岩を多量にとまなっている。本図では硬い珪質岩をチャート(Ch)と一括して表現したが、実際の分佈状態より多少誇張して示してある。
	ls	石 灰 岩	古・中生層にレンズ状に挟むる石灰岩。赤石山地の古生層からなる小波帯には、厚さ400~600mの厚い石灰岩が連続的にみられるのが特長である。南にうすくなって、しばしば珪質岩や粘板岩と互層する。佐久山地の石灰岩は一般に灰白色を帯びるが、花崗岩の貫入により変質をうけたところでは粗粒結晶質となっている。塩尻市東南の善知鳥峠、そのほか各所で採掘されている。
	L	火 山 灰	火山灰層は伊那・木曾谷・松本・諏訪盆地のほか、野尻湖周辺や佐久地方などに広く分布するが、本図には一部をのぞいては示してある。火山灰層は古期・中期および新期火山灰に区別される。野尻湖周辺の古期火山灰は豊野層と同時異相の関係をしめしている。
Py	火 山 砕 屑 物	本図には、白馬乗鞍火砕堆積物(多くの溶岩流とともに多くの泥流・火山灰・火山礫からなる)、浅間湖流堆積物および豊原川・御牧が源流堆積物など未固結~半固結の火砕物質を一括して示した。	

火 山 性 岩 石	Ar	安山岩および凝灰角礫岩	中新世~前期洪積世の火山砕屑岩類を一括した。大部分は火山角礫岩・凝灰角礫岩であるが、一部に安山岩質溶岩(塊状~塊状溶岩)・砂質凝灰岩・火山円礫岩などがふくまれる。これらは互層し、ときにクロス・ベツドをしめしている。新第三紀の火砕岩は、沸石化作用、緑泥石化作用をうけ汚染している部分がある。
	Tr	凝灰岩質岩石	本類には新第三系下部に属するいわゆる緑色凝灰岩類をふくめた。このほか、中新世から鮮新世にかけて発達する凝灰岩類もこの記号(Tr)であらわしてある。これらの岩相は多様であるが流紋岩質ないし石英安山岩質である。
	Ry	流紋岩質岩石	新第三系の緑色凝灰岩の基準より上位の流紋岩・石英安山岩を一色で塗色した。このほか、中生代白堊紀の濃形流紋岩、新第三紀末の志賀凝結凝灰岩(いわゆる信州溶岩)を本類にふくめてある。
	Ab	安山岩質岩石	第四紀の火山活動による安山岩類を一括塗色してある。帯岩流と「集塊岩および凝灰角礫岩」を区別していない。したがって本類中には、凝灰角礫岩が多量にふくまれている。本図では、新第三紀に活動した安山岩の岩脈や岩床もこの記号(Ab)であらわされている。
	B	玄武岩質岩石	小県郡内町地域の虚空蔵玄武岩、碓氷一頂或地城の保科玄武岩など、新第三紀中新世の安山玄武岩を主とする地層である。志賀高原に分布する馬場溶岩は複雑な安山岩であるが、その下部に玄武岩をとまなっている。また広域にわたって熱水変質をうけ、白色粘土化している。本図では、便宜的に、玄武岩質岩石として塗色してある。
	Qz	斑 岩	石英斑岩ないし花崗斑岩状岩石、岩脈・小岩株をなして露する。高瀬川流域では花崗岩中に多数の岩脈が観察される。産状によって13の基群に分類されているが、これらは中生代後期の火成活動によるものと考えられる。この種の岩石は佐久山地の灰栗山産層のまわりにも顕著に発達している。貫入時期は漸新世以降である。
	Po	玢 岩	緑色凝灰岩の分布地域には、岩床、岩脈をなして、多数の斑岩の貫入がある。その多くは、深成岩と半深成岩の中間的な岩質をしめし、地質構造とあわせて、調和的に存在している。なお北部では、小川原を貫く斑岩があるが、前記とは異なるものと考えられる。また、北アルプスの成島峠付近に一種斑岩付近にはその岩味がみられる。
	Gr	花崗岩質岩石	本図では花崗岩・花崗閃緑岩・閃緑岩を一括した。飛騨山地の花崗岩類は両葉母花崗岩・黒雲母花崗岩・閃緑花崗岩がその主なものである。嶺南花崗岩類は濃形流紋岩以後の新期花崗岩(花崗閃緑岩~花崗岩)とそれ以前の古期花崗岩(石英閃緑岩~花崗閃緑岩)に大別される。フォッサ・マグナ地域に分布する石英閃緑岩~花崗閃緑岩は中新世中期から末にかけての貫入岩体であるが、その貫入した深さ、岩体の規模などに起因する冷却速度の差に応じて、同一岩体内でも深成岩から半深成岩(閃緑閃緑岩・石英斑岩)ないしは火山岩(安山岩)までの、種々の岩質変化をしめしている。
	Gh	斑 岩 質 岩 石	塩基性ないし超塩基性岩類を一括した。三波川帯のものは斑岩および角閃岩、嶺南帯のものは石英閃緑岩質斑岩~斑岩~コードランド岩である。高瀬川にも幅150mの斑岩岩体がある。一見して岩脈状であるが、その周縁部では黒雲母が多く集って、ついに閃緑岩質に移過する。
	Gd	変 輝 岩 類	花崗岩中に黒色捕獲岩としてとまなわれるものである。閃緑岩または輝緑岩質であるが、原岩は黒雲母角閃岩閃緑岩~斑岩~コードランド岩である。露頭では花崗岩による接触変質をうけているものもみることがある。この種の岩石は嶺南帯のなかに数多く分布している。
変 成 岩	Sp	蛇紋岩質岩石	蛇紋岩は三波川帯のほか、白馬山麓、佐久山地の山中地帯等に分布している。三波川帯では大垂村入沢井などに大きな岩体が見られる。白馬山麓では小谷村黒馬北方、八方山などに大きな岩体がある。古生層を貫き、中生層とは断層で接することが多い。山中地帯では、蛇紋岩体にニッケル・クロームがとまなわれることがある。
	Hr	ホルンヘルス	古生層が花崗岩類により貫かれている付近では、熱変成作用のためホルンヘルス化している。嶺南帯では、花崗岩にかこまれ、ホルンヘルスから、黒雲母片麻岩になっているものが多い。本図では古生層が全体として広域変成作用をうけ、片状ホルンヘルス~縞状片麻岩などの変成岩に変わったものを一括した。
	Ge	緑 色 片 岩	中央構造線の東側の三波川帯は多くの断層・褶曲により複雑な地質構造をなし、その中の変成岩の岩相もさまざまである。緑色片岩類はこの三波川帯に特徴的に分布する。塊状の緑色岩をふくみ、原岩は中生代末の塩基性火成岩類である。
	Bs	黒 色 片 岩	三波川帯に分布する理髪質黒色片岩を主とする岩相。珪質片状砂岩・石英片岩・塩基性の緑色片岩などの薄層をばさみ、石灰岩もすくはさまれることが多い。分布は北部では幅広く南部ではせまくなって、消滅している。
	Algh	緑 色 片 岩・ 黒 色 片 岩 互 層	白馬山麓の小白向沢、および地沢の殺生小屋上部から真の小室付近、瀬田谷への下りにかけて分布する珪質片岩類は主に本互層からなる。諏訪湖北方の横河川上流にも緑色片岩・黒色片岩よりなる地河変成岩がある。
Ms	圧 碎 岩 質 岩 石	中央構造線の北側にすくはさまって分布している。石英閃緑岩質~花崗岩質岩石が、進入しながら、その前面で構造運動ともなう激しい圧砕作用をうけてきたと考えられているミロナイトである。見かけから、ボーフィロイド様岩と細粒珪質のヘレフリンタ様岩にわけられ、どちらも片状構造がいちぢるしい。	

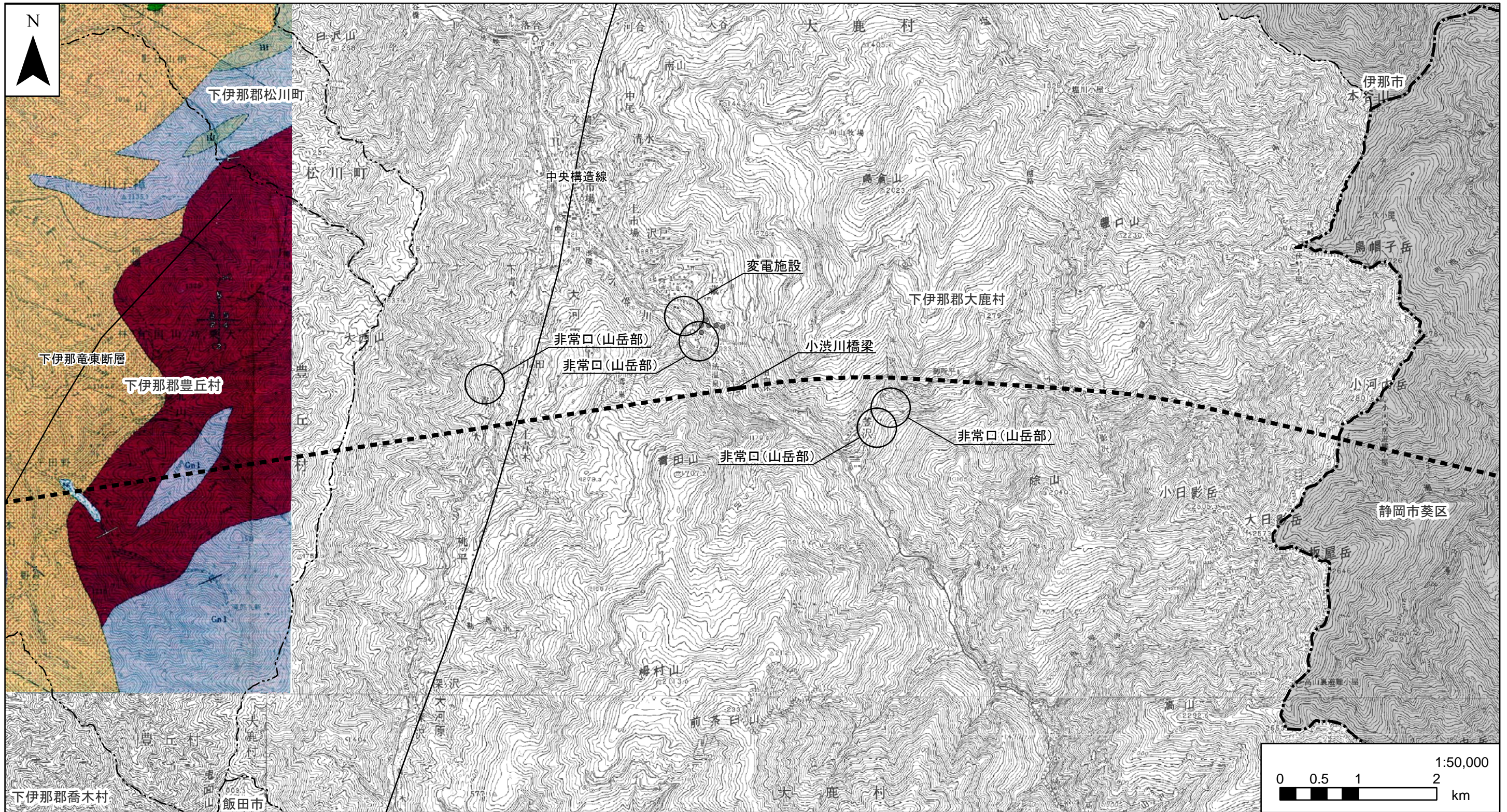
本図は、国土調査による「1/200,000土地分類基本調査 表層地質図(長野県)」(昭和49年、経済企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-17(2) 表層地質図









凡例

--- 計画路線 (トンネル部)    — 計画路線 (地上部)    ●●●● 工事用道路    - - - 県境    - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。

注2. 凡例は、図4-2-1-17(6)に示す。

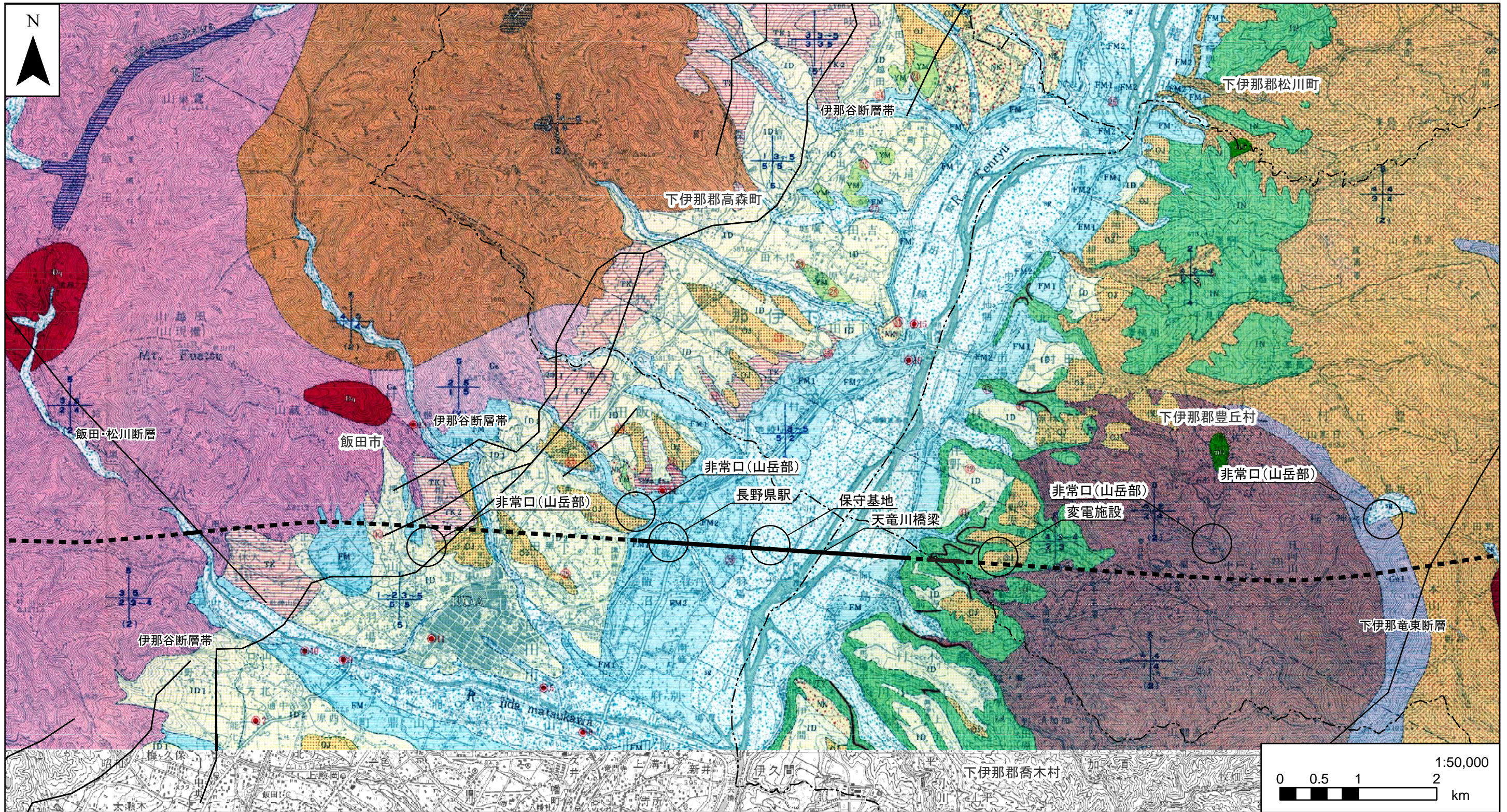
本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 表層地質図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-17(3) 表層地質図









凡例

--- 計画路線（トンネル部） — 計画路線（地上部） ●●●● 工事用道路 - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。  
注2. 凡例は、図4-2-1-17(6)に示す。

本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 表層地質図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-17(4) 表層地質図









凡例

--- 計画路線（トンネル部） — 計画路線（地上部） ●●●● 工事用道路 - - - 県境 - - - - 市区町村境

注1. 他の図面と表示範囲が重なる箇所については、調査地点等を重複して記載しているものもある。

注2. 凡例は、図4-2-1-17(6)に示す。

本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 表層地質図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

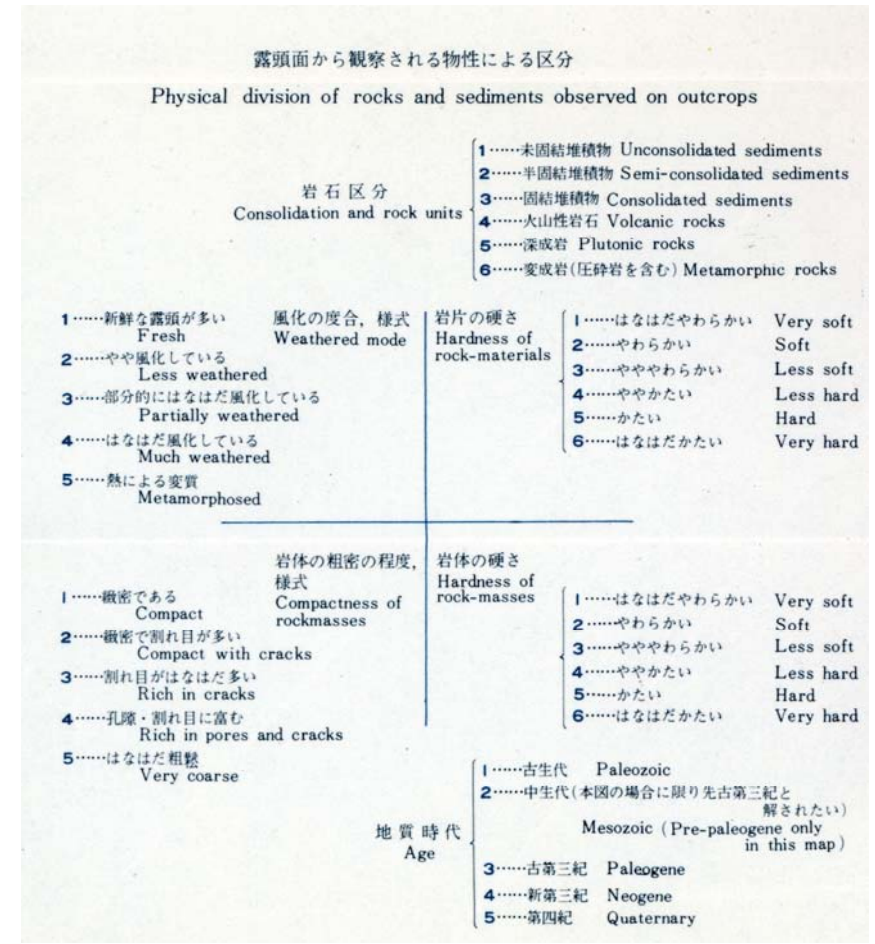
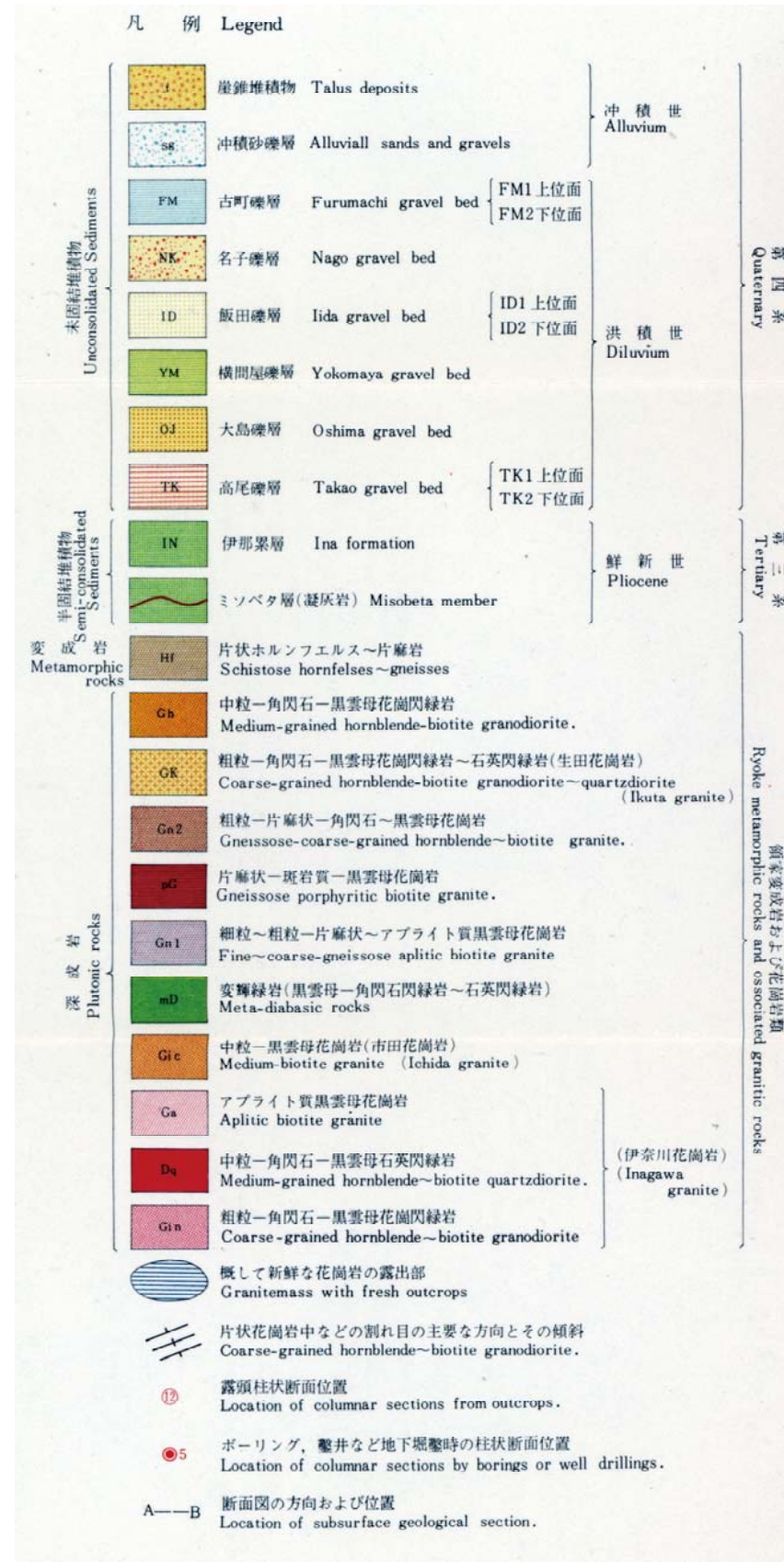
図4-2-1-17(5) 表層地質図







飯田



本図は、国土調査による「1/50,000土地分類基本調査 表層地質図(飯田)」(昭和42年、総合企画庁総合開発局)を使用し、東海旅客鉄道株式会社が作成したものである。

図4-2-1-17(6) 表層地質図



